

細く艶やかな絹糸は手織り機に張り渡され、経糸の際に杼（ひ）が行き交うたび、篋（おさ）でカットと手前に打つて織られます。手織りはここインドネシアでも、近年始まらな作業。1986年に伝統的な絹更紗作りをスタートさせたコアラさんは、当時すでに仕事を辞めていた職人たちを探し出し、布作り再生の夢を語り、躊躇する彼らに「でもね、努力する人がいなくてはいけない。とにかくやってみて」と励ましながら、ようやく実現に漕ぎつけたのだそうです。「ビンハウス」の絹生地は、イカット織をベースにした複雑な変わり織が持ち味。今回ご紹介するスカーフは、絹糸の光沢がほのかに交差する格子柄を採用しています。この地紋様が、後の柄染めを麗しく引き立てる隠し味です。



熱口を冷ましつつ、カスを取り除くための一息。布の下にあてがった左手を持ちあげ、染色時の色漏れを防ぐべく裏面までしっかりと口を浸透させます。



インドネシア語でヒンヤウを意味するチャンティンは、赤銅の先端部分に竹などの柄を合わせたもの。口先にスリットを入れるなどして、職人が使いやすいようにカスタマイズ。

職人としての矜持が、 紋様に生命を吹き込む。

ここで、ろうけつ染めについてご説明しましょう。古くは中国で2〜3世紀頃に、また日本でも正倉院宝物などに天平時代からみられるこの染色法は、染めない部分に口ウを置き、色が入るのを防ぐ技法。「ビンハウス」では伝統に則って、口ウ置きで防染した布を染料に漬け、水で色縮めした後、グツグツと煮えたぎる熱湯にくぐらせて口ウを落とし、さらにまた水で洗って乾かす。この工程を回数や濃淡に応じて、緻密な口ウ置きから逐一繰り返して仕上げます。元々バティックという言葉はジャワ語で「ンバツ」は投げる、「ティック」は小さな点という意味だとか。プリントに慣れ切った私たちにとっては俄には信じがたい作業量です。手描きによるバティック・トゥリスは、チャンティンと呼ばれる口ウ引き道具が筆代わり。作業場には、むせるような口ウの香りが立ち込めています。フツフツと鍋に湧く口ウをチャンティンですくい取り、ノズル部分に溜まったカスをフツと息で取り除いてから、織り地に浸透させて線を描く。スツと引いていきますが、線を均一な幅にするには、口ウの温度が下がるにつれチャンティンの先を下に傾ける微妙な調整が必要。自在に操る女性たちは皆、10年以上のキャリアを持つベテランです。なかには先祖代々の仕事を継承している人もいれば、「ビンハウス」が主催するセミナーに触発されて就業したという人も。口ウ鍋を中心に円陣を組んで和やかに座りつつ、各々が自分の手先に集中する姿はどこか厳か。かつて王宮の女性たちが精神修養としてバティック作りに勤しんだ、という典雅な情景を偲ばせます。

「ビンハウスでは職人を労働者としてではなく、一人のアーティストとして敬っています」と語るコアラさん。そのため、職人の描きぶりは実に生き生きとしています。サラサラと流れるような手の運びは単に下絵をなぞっているのではなく、その時々心に浮かぶ美しさを捉えながら、それを布上に映かせるかのよう。描くことの誇りと喜びに溢れた筆致は、緩急があつて伸びやかです。それは「手仕事」ということが貴重なのではなく、そこに込められた職人の魂こそが大切」というコアラさんの言葉を裏付けています。例えば実物の名画が印刷のそれとまるで別物であるように、この一枚には機械やデジタルでは表現し得ない、作り手の細やかな想いが鮮明に息づいています。誰かと美しい想いを共有することが愛ならば、その素晴らしさを手に取る人に伝えるために、この布は存在していると思うのです。



忍耐力が必要とされる緻密な作業は、ジャワ宮廷の女性の嗜みとされていました。